

## 一 般 演 題

### 1. $^{123}\text{I}$ -IBF を用いた類 Parkinson 病患者の脳ドーパミン D2 受容体の検討

吉田 毅 桑原 康雄 佐々木雅之  
 中川 誠 陳 涛 福村 利光  
 増田 康治 (九大・放)  
 一矢 有一 (九州がんセ・放)

ドーパミン D2 受容体結合薬  $^{123}\text{I}$ -IBF (IBF) を用い、類 Parkinson 病患者の脳集積を検討した。対象は Parkinson 病 (PD) 7 例、Parkinson 症候群 (PS) 4 例、計 11 例すべて Hoehn & Yahr (III) で、IBF 167 MBq 静注後 2, 3 時間中心に 21 分間 SPECT を撮像した。線条体集積は後頭・前頭葉を参照とした定量的指標を用い、OM line の傾き・ROI の形状 (template, free hand) の影響も検討した。傾きが  $\pm 3^\circ$  以内では指標の変動は 5% 未満であったが、形状間には最大 10% の差がみられた。PS では PD より線条体集積が低下していたが、2 時間後の前頭葉比のみで有意差を認めた。IBF SPECT では、ROI の形状による差は無視できず、鑑別診断には指標として前頭葉比が有用と考えられた。

### 2. 脳 SPECT にて Hollow Skull Image を呈した例について

桂木 誠 荒木 昭輝 船津 和宏  
 竹吉 正文 佐土原順子 高良 真一  
 西原 春實 (聖マリア病院・画像診断部)  
 鳥越隆一郎 (同・脳神経セ)

脳死の確認を目的に行われた脳 SPECT について検討した。対象は 6 歳以上 43 例、6 歳未満 6 例である。6 歳以上では 42 例が Hollow Skull Image (HSI) を呈した。検査後 0-22 日 (平均 4.7 日) 後に心停止をきたしている。残り 1 例は小脳に血流が見られたが 4 日後に心停止となった。6 歳未満では 4 例で HSI を呈した。23-445 日 (平均 141 日) 後の心停止をきたした。残り 2 例は基底核域に血流がみられたが、意識の改善のないまま 414 日と 757 日目に心停止をきたした。

HSI は、心停止までの長短はあれ脳死を強く示唆する指標と思われた。なお、脳死であっても、血流がわずかに残存する時間のある可能性がある。

### 3. 髄膜腫の組織型と $^{11}\text{C}$ -methionine, $^{18}\text{F}$ -FDG, $^{201}\text{Tl}$ 集積との関係

陳 涛 佐々木雅之 桑原 康雄  
 吉田 毅 中川 誠 福村 利光  
 増田 康治 (九大・放)

髄膜腫の組織型と  $^{11}\text{C}$ -methionine (MET),  $^{18}\text{F}$ -FDG (FDG) および  $^{201}\text{Tl}$  (Tl) 集積との関係を検討した。対象は 15 例の髄膜腫患者で、内訳は meningotheial 7 例、transitional 3 例、fibrous 4 例、psammomatous 1 例である。MET, FDG 集積は体重で補正した投与量に対する集積比 (SUV) にて、Tl 集積は対側正常部に対する集積比 (L/C 比) にて評価した。MET, FDG および Tl のいずれにも組織型別の集積には有意な差は認められなかった。Tl 集積は MET 集積と相関を認めたが ( $r=0.71$ ), FDG 集積とは相関は認められなかった ( $r=0.01$ )。Tl 集積と MET 集積には相関が見られ、両者の髄膜腫への集積に共通する機序が示唆された。

### 4. 側頭葉てんかんの焦点診断におけるベメグリッド負荷脳血流 SPECT の有用性の検討

——FDG-PET との比較——

中川 誠 桑原 康雄 佐々木雅之  
 吉田 毅 陳 涛 福村 利光  
 増田 康治 (九大・放)

側頭葉てんかんの焦点診断におけるベメグリッド負荷脳血流 SPECT の有用性について、FDG-PET と比較検討した。対象は、術中脳表電極により診断が確定した 7 例である。脳血流 SPECT は、発作間歇期およびベメグリッド誘発発作時に、FDG-PET は発作間歇期に行った。発作間歇期の脳血流は 7 例中 3 例で側頭葉に低下を認めた。ベメグリッド負荷時では発作間歇期異常のなかった 4 例中 3 例、低下が見られた 3 例